

パニウム - ナンバーエイト

第3線の概要

Jeff Pippenger

2025-03-17

セレウコス3世ケラウノスは、紀元前226年から紀元前223年までの短期間、国王として在位したが、のちに暗殺されたか、あるいは不可解な状況のもとで死亡した。セレウコス3世はアンティオコス3世の直前の王であった。この二人の兄弟は第十節の「息子たち」を表しており、1989年のレーガンとブッシュを表している。

しかし彼の子らは奮い立って大軍を集め、そのうちの一人が必ずや来て、押し流し、通り過ぎる。やがて彼は引き返し、彼の要塞に至るまで再び奮い立つ。ダニエル書 11:10.

第十節は三行目であり、1989年の「終わりの時」を表している。これは十一章四十節およびイザヤ書八章八節と結びついている。これら三つの節のつながりによって、第十一節が現在のウクライナ戦争を表しており、第十一節に示されたラフィアの戦いにおいてプーチンとゼレンスキーが敵対者として表されていることが明らかになる。第十二節はウクライナ戦争の余波とプーチンの運命を示す。第十三節から第十五節はパニオンの戦いを扱っている。

第十節の主題は「終わりの時」であり、「終わりの時」における真理の封印が解かれることに関わる諸原則に即して、この節は一節にすぎないにもかかわらず、多くの預言的な筋道が表されている。第十節は、第三の天使の運動の始まりと十四万四千人の封印の始まりを画する、第四十節の隠された歴史の始まりを示している。

この節は、イザヤ書第七章に始まる幻で示されているとおり、レビ記二十六章の七度を結び付けている。その結び付きは、神性と人性の結合を指し示しており、それは第七のラッパ、すなわちイスラムの第三の災いが鳴り響く間に敬虔の奥義が完成することを意味する。

この節は1989年を終わりの時として示し、レビ記26章の七倍との関連により、ウィリアム・ミラーの基礎的な真理と1863年の反逆を含んでいる。この節は四十節の隠された歴史を開始する。ゆえにこれは、1989年の終わりの時に到来する知識の増大の不可欠な要素であり、四十節の隠された歴史を構成する外的出来事の預言的な描写を開始し、さらに七倍との関連を通して、1989年から日曜法に至るまでの歴史における内的出来事も特定する。

十という数は試練の象徴であり、真理の理解を強調するイザヤ書7章の幻とこれらの節との関連性がある。

アラムの頭はダマスコ、ダマスコの頭はレツィン。六十五年のうちにエフライムは打ち砕かれて、もはや民ではなくなる。エフライムの頭はサマリヤ、サマリヤの頭はレマリヤの子。もしあなたがたが信じなければ、必ず堅く立つことはできない。イザヤ書

7:8、9

「頭」は首都（サマリアとダマスコ）と王（レツインとレマリヤの子ペカ）を表すと信じないなら、あなたは堅く立つことはできない。イザヤ書8章8節（7章と同じ幻）の文脈で、その入れ替えて用いられる三つの象徴を理解していないなら、11節から15節でプーテンとロシアを南の王として特定することはできない。

それゆえ今、見よ、主は彼らの上に、勢い強く多くの川の水、すなわちアッシリアの王とそのすべての栄光を、押し寄せさせる。彼はそのすべての水路にあふれ、そのすべての岸を越えて行く。彼はユダを通り抜け、あふれて越え、首にまで達する。彼の翼が伸び広がって、あなたの地の広がりを満たすであろう、インマヌエルよ。イザヤ書8:7、8。

第10節の主題は、終わりの時に始まり、日曜法における恩恵期間の終わりへと至る三段階から成る試練の過程である。

彼は言った。「ダニエルよ、あなたの道を行きなさい。これらの言葉は終わりの時まで閉ざされ、封印されている。多くの者は清められ、白くされ、試される。しかし、悪しき者は悪を行い、悪しき者のうちには悟る者がいない。だが、賢い者は悟る。」ダニエル書 12:9、10

「終わりの時」には「ダニエル書」の封印が解かれ、「清められ、白くされ、試される」によって表される三段階の試練の過程が始まる。「賢い者」は悟り、「悪しき者」は悟らない。十人の乙女のたとえで油が足りなかったのと同様に、彼らの悟りの欠如が彼らを滅びに至らせる。

わたしの民は知識がないために滅ぼされる。あなたが知識を退けたので、わたしもあなたを退け、あなたをわたしの祭司とはしない。あなたが自分の神の律法を忘れたので、わたしもあなたの子らを忘れる。ホセア書4章6節。

「わたしの民」という語は契約の民を意味しており、この契約の民は「知識がない」ために退けられ、滅ぼされることになる。アメリカ合衆国の「日曜法」は、物事が忘れ去られるのか思い起こされるのかを分ける道標である。その時点では「安息日を覚えて、これを聖とせよ」が現在の真理である。そこでツロの淫婦が思い起こされる。そこで神は、黙示録に記されたバビロンの罪を思い起こされる。

また、私は天から別の声を聞いた。「わたしの民よ、彼女から出て来なさい。彼女の罪にあずからず、彼女の災いを受けないためである。彼女の罪は天にまで達し、神は彼女の不義を思い起こされた。彼女があなたがたにしたように、彼女に報いよ。その行いに応じて、彼女に二倍を返せ。彼女が満たした杯には、彼女のために二倍を満たせ。」ヨハネの黙示録 18:4-6

まさにそこで、子ら、すなわちラオデキア的アドベンチズムの預言的な最後の世代が絶たれる。まさにそこで、ダニエルが「悪者」と呼ぶ者たちが、神の律法を「忘れた」ことを示し、彼らが忘れた神の律法の部分は、神の預言的な規則または法である。文脈は明らかに、ダニエル書の封印が解かれるときに増し加えられる「知識」を彼らが欠いているということである。ダニエルは「賢い者」と「悪者」を対比し、イエスは「賢い乙女」と

「愚かな乙女」を対比している。アモスは、同じ人々を「美しい乙女たち」と呼び、東と北と海によって表される預言的メッセージを見いだせない者たちとして示している。

見よ、日が来る、と主なる神は言われる。そのとき、わたしはこの地に飢饉を送る。パンの飢えでも、水の渇きでもなく、主の言葉を聞くことの飢えである。人々は海から海へさまよひ、北から東へと、主の言葉を求めて行きつ戻りつ走り回るが、見いだすことはできない。その日には、うるわしいおとめたちも若者たちも、渇きのために衰え果てる。サマリアの罪にかけて誓い、「ダンよ、おまえの神は生きておられる」とか、「ベエル・シェバの道は生きている」と言う者たちも、倒れて、二度と起き上がることはない。アモス 8:11-14。

彼らが「海から海へ、また北からな東へ」とさまよひながら探している行き先そのものが、彼らの見つけられないメッセージを表しています。アモスは、これらの「美しい乙女たち」が「主の言葉」を聞くことの「飢饉」の中にあり、また「その日、彼らは主の言葉を求めてあちこち走り回るが、見いだすことはない」と言っています。終わりの時である1989年に、第十一章の第四十節および第十節の成就としてダニエル書から封印が解かれたそのメッセージは、第十一章の最後の二節に要約されています。

しかし、東からと北からの知らせが彼を騒がせる。それゆえ、彼は大きい憤りをもって出て行き、滅ぼし、多くの者をことごとく絶やそうとする。彼は海と海との間、麗しき聖なる山に王の天幕を張る。しかし、彼はその終わりに至り、彼を助ける者はひとりもない。ダニエル書 11:44、45。

油を欠く愚かな乙女、美しい乙女、そして邪悪な乙女、ならびに知識と神の契約と律法を拒んだ東、北、海のメッセージは、日曜法のときに神に覚えられる。10節から15節には三つの戦いが表されている。私はこれら三つの戦いを三つの歴史に分けるが、合わせて考えるとそれらは一本の線でもある。というのも、10節が「終わりの時」を開き、ゆえに三段階の試験の過程を開始するからである。

10節はレビ記26章の「七つの時」と結びついており、したがってアドベンチズムの土台とウィリアム・ミラーの働きに関わっている。三段階のうちの第二段階は、11節の光が開かれ、ウクライナ戦争が始まったときに始まった視覚的な試験である。第二の試験は視覚的なもので、神の預言の御言葉の光に照らして現在の出来事を見分ける私たちの能力に関する試験を表している。第三の試験は15節のパニウムの戦いであり、そこでシモン・バルヨナの名がペテロに変えられ、それによって、16節の日曜法で恵みの期間が閉じられる直前に、十四万四千人が封印されることが示された。

10節、11節、15節に表されている三つの戦いそれぞれにおけるアンティオコス・マグヌスの登場を考えると、9節から16節の歴史の中に、聖書の預言における偽預言者の興亡も見取れる。

1節から4節は竜の勢力の興亡を示している。9節と10節はそれぞれ1798年と1989年を指し示しており、このことによって9節から16節は偽預言者の興亡を示している。40節から45節は獣の興亡を表している。9節と10節はまた、40節にある二つの「終わりの時」（1798年と1989年）とも一致する。

ホワイイト姉妹は、「終わりの時」を誤解すると、預言をどこに適用すべきかについて混乱が生じるのだと、私たちに明確に教えている。

多くの人々は、第一、第二、第三の天使のメッセージに含まれている、試練となるメッセージにおける経験がないために、今日、すなわち1897年においても、同じことをしている。これらのメッセージがなお将来のことであるという証拠を求めて、聖書を調べている者たちがいる。彼らはメッセージの真理性を集めはするが、預言史の中でそれらにふさわしい位置を与えることができない。ゆえにこのような者たちは、メッセージの位置づけに関して人々を誤らせる危険にある。彼らは終わりの時を見て理解せず、また、いつメッセージを位置づけるべきかも分かっていない。神の日は忍び足で近づいているが、賢明で偉大だとされる人々は、有限な人間に由来すると彼らが思い込んでいる「高等教育」について、しゃべり立てている。彼らはキリストの来臨のしるしも、世の終わりのしるしも知らない。説教と談話 第1巻 290頁。

第十節の主題は「終わりの時」であり、第十一章には複数の「終わりの時」が特定されている。もし第十一章の「終わりの時」を「見ても理解しない」なら、いつ「メッセージを当てはめるべきか」を知ることはできない。彼女は「聖書を調べている者たちがいる」と言い、そしてすべての預言者と同様に、彼女の言葉は終わりの日々を指している。それゆえ、終わりの日々において彼女が指し示しているのは「終わりの時」を理解しない一群の人々であり、彼らはまた、倒れて二度と立ち上がらないアモスの「うるわしいおとめたち」でもある。

第11章1節では、ダリウスとキュロスが共に並び立ち、1989年の「終わりの時」を示している。プトレマイオスがバビロンに赴き、北方の王を捕らえてエジプトに捕囚として連行した紀元前246年の出来事は、7節から9節に示されているように、1798年を表す型となるものであり、それも「終わりの時」であった。10節は1989年の「終わりの時」である。

1798年は、紀元前723年に始まった北イスラエル王国に対する離散の2520年の終わりである。そこから1260年後の538年に、教皇制は1798年までの1260年間支配した。1798年は「終わりの時」である。というのも、それは七つの時の終わりであり、1260年の終わりであり、さらにダニエル書12章の1290年の終わりでもあるからである。1798年は「終わりの時」であり、したがって538年もまた「終わりの時」である。538年は、異教が神の聖所とその軍勢を踏みにじった1260年の終わりであり、その後、同じ期間にわたって教皇制が同じ働きを行った。

538年は教皇権の強化を表しており、その意味で、日曜法において再び教皇権の強化を表している。日曜法は「終わりの時」を指し示す。ゆえに、16節だけでなく、1節、7～9節、10節もすべて「終わりの時」を示している。この真理は、メッセージをいつ位置づけるかを知っている者によって理解されるべきである。ポンペイはエルサレムを攻略したときに16節を成就した。彼に続いたのは、ジュリアス・シーザー、オーガスティヌス・シーザー、ティベリウス・シーザーである。イエスの誕生は「終わりの時」であり、それはオーガスティヌス・シーザーの時代に起こった。

やがてその地位に、王国の栄華のうちに税を取り立てる者が立つ。しかし数日のうちに、怒りによらず、戦いによってでもなく、彼は滅ぼされる。ダニエル書 11:20。

二十節は第十一章の「終わりの時」の一覧に加わっており、キリストの十字架刑の時に在位していたティベリアス・カエサルも同様である。

そして彼の位には、卑しむべき者が立つ。人々は彼に王としての名誉を与えないが、彼は静かにやって来て、へつらいによって王国を手に入れる。洪水のように押し寄せ、軍勢によって、彼の前から彼らは押し流され、打ち碎かれる。契約の君さえも。ダニエル書 11:21、22。

十字架は、キリストが多くの人々とともに確証するために来た預言の週の半ばにある。

彼は一週間のあいだ多くの人々と契約を堅く定め、週の半ばにいけにえと供え物をやめさせ、忌むべきものの蔓延のゆえにそれを荒廃させる。終局に至るまでそうであり、定められたものが荒廃の上に注ぎかけられる。ダニエル書 9:27

週の半ばに、最初の千二百六十日が終わったその時点で、次の千二百六十日がちょうど始まります。この週は、異教と教皇主義の双方による聖所と軍勢の蹂躞を象徴していた北の王国に対する七度の散らしと一致しています。

そのとき、私は一人の聖なる者が語るのを聞いた。すると、別の聖なる者が、語っていたあの聖なる者に言った。「日ごとのささげ物に関する幻と、荒廃をもたらす背きは、聖所と軍勢の双方が踏みにじられることになるまで、いつまで続くのですか。」
ダニエル書 8:13。

538は「終わりの時」であり、預言的な期間の終わりでもある十字架と符合する。538と十字架は、預言の始まりと終わりの双方が「終わりの時」として預言的に位置づけられていることを示す二つの証しとなる。

21節と22節、20節、16節、10節、7節から9節、そして1節はすべて「終わりの時」を示している。23節は、紀元前161年から158年にかけてマカバイ派のユダヤ人が異教ローマと結んだ同盟を示している。ハスモン朝の歴史は、最初の戦いから始まり、西暦70年のエルサレムの破壊で終わるが、これは米国における背教的プロテスタントを表しており、それは時の預言の終わり、すなわち「終わりの時」である1844年に始まり、西暦70年によって表される日曜法で終わる。

二十三節は、紀元前167年のモデインの戦いと紀元70年を「終わりの時」として特定しており、両者はそれぞれ1844年と日曜法を象徴している。二十三節、二十一節と二十二節、二十節、十六節、十節、七節から九節、そして一節はいずれも「終わりの時」を示している。

24節は、異教ローマの360年にわたる覇権を示し、したがって紀元前31年の始まりと紀元330年の終わりの双方を「終わりの時々」として位置づけている。27節と29節はその期間の始まりと終わりの双方を示している。24節、27節、29節、23節、21節と22節、20節、16節、10節、7節から9節、そして1節はすべて「終わりの時」を示している。

第31節は、荒らす憎むべきものが立てられた時として538年を示し、第36節と第40節は「終わりの時」として1798年を示している。第31節の538年と第36節および第40節の1798年、さらに第27節と第29節、第24節、第23節、第21節と第22節、第20節、第16節、第10節

、第7節から第9節、そして第1節は、いずれも「終わりの時」を指し示している。

「終わりの時」は、日曜法であり別の「終わりの時」でもある41節の前に13回記されている。さらに、だれも助ける者がいないまま教皇がその終わりに至る45節も同様に別の「終わりの時」である。十一章の中で「終わりの時」は計15回記されている。10節の主題は「終わりの時」であり、それは十四万四千人の封印の時期に解き明かされる真理を表している。

続きは次回の記事でお届けします。